二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 羽沢向一

挿絵 高浜太郎

プロローグ 006
第一章 フェアリーフォース・カウントダウン 015
第二章 未亡人（パズルボックス・オブ・ウィドウ）の迷宮 057
第三章 氷の美女（マッシャー・オブ・アイスビューティー）の調教師 105
第四章 少女（エピタフ・トゥ・リトルガール）への墓碑名 141
第五章 妖精（ブット・カラー・オン・フェアリーズ）たちに首輪を 169
第六章 妖精（フレッシュ・ペナルティ・オブ・フェアリーズ）たちの肉の罪 195
第七章 フェアリーフォース・インフィニティ 242
フェアリーフォース・インフェルノ 276

登場人物紹介

Characters

サージフェアリー／不破唯（ふわゆい）

正義のヒーローチーム、フェアリーフォースのリーダーにして、ゲーム会社フェアリーキャッスルの社長。未知のエネルギーを自在に操る美熟女。

アイスフォール／氷流沙良（ひりゅうさら）

冷気を操るクールで知的な美女。フェアリーフォースのメンバーの一人で、普段は唯の秘書をしている。

ライトガール／月賀光（つきがひかり）

強靭な怪力と防御力、さらに飛行能力を持ったフェアリーフォースの新人メンバー。元気溌剌で正義感の強い少女。

ブックメーカー

裏世界の賭け事の胴元をしている、有名な犯罪プランナー。現実に凶悪事件を起こして、その結果を賭けの対象にする。

バラガン皇太子

異次元世界オスドリゴル大帝国の皇太子。筋肉隆々のたくましい美青年で、冷酷かつ残忍な性格の持ち主。

不破正（ふわただし）

不破唯（サージフェアリー）の夫。

『第三章　氷の美女の調教師』より

黒い球が表面に触れた、と思うと氷の胴体に獣の頭が生えた。黒と白の体毛といい、白く渦巻く眼球といい、開いた口に列をなす牙といい、さっきローブの下から出てきて凍らされたシベリアンハスキーもどきの怪物の同類だ。

マッシャーの胸からも、腹からも、背中からも、犬に似た凶暴な怪物の首が生えて、牙を鳴らし、舌なめずりして、涎を垂らしている。

「なに、それは」

「俺の兄弟ダ。立テ」

氷の両手が、アイスフォールの左右の手首を握った。反射的に敵の指を振りほどこうとしたが、生物の皮膚とは全然違う硬い指は、万力のようにびくともしない。

「まだよ」

もう一度、風と冷気を呼び、目の前の氷と獣の怪物にぶつける。

だが、なにも起きなかった。微風すら吹かず、新たな氷を作ることもできない。自分のオフビート能力を、同質でより強大なパワーで打ち消されている。

（これでは、わたしはただの人間になってしまう）

望んで持って生まれた能力ではなくとも、今では自分のアイデンティティだ。オフビートパワーを使えない自分など、考えられない。

アイスフォールの苦悩などかまわずに、マッシャーが軽々とスーパーヒーローの腕を引っぱりあげて、強引に立たせた。人形のようにあつかわれて、腕力でもけっして勝てない

と思い知らされる。アクションフィギュアのポーズを決めるように、無理やり両腕をひねられて、両手の指を組まされると、後頭部のうなじに押しつけられた。

戦場で捕虜が取らされる無抵抗の姿勢だ。同時にセクシーグラビアでよく見る、胸をそらしてバストを強調するだけでなく、両腕の脇をも見せびらかすポーズでもある。

もともとアイスフォールの青いボディスーツに包まれた胸は、とても大きい。ボリュームがあるだけでなく、十代のころから身体を鍛えてきたおかげで、ぶりっとした弾力があり、強い筋肉に支えられて前へ突き出している。

アイスフォールの感情の起伏を表さないクールな雰囲気も加味されて、同じ巨乳でもサージフェアリーの柔らかな包容力を持った乳房とは好対照をなしている。ファンの間では、二人のタイプの異なる美巨乳の優劣をめぐって言い争いになり、勝手にネットで投票が行われることもしばしばだ。

その魅惑のバストが、強制された従属のポーズのために、いっそう強調された。

アイスフォールのコスチュームは袖がないので、同時に裸の脇をマッシャーに見せつけることにもなっている。

マッシャー自身の髑髏じみた顔からはなにも表情が読めないが、身体から生えた怪物たちの頭の白濁した眼球が、アイスフォールの艶めかしいポーズを見つめているのは確かだ。興奮しているのか、牙の列の奥から出る息が荒くなっている。

アイスフォールの腕から、マッシャーの手が離れた。どういうつもりなのかはわからな

いが、急いで後頭部にまわした腕をほどいて、敵の前から離れようとする。
「えっ⁉」
腕が頭から離れない。足も地面からあがらず、一歩も動けなかった。セクシーポーズのまま、四肢が固まっている。
「なぜ、動けないの！」
「おまえノ、関節ヲ、凍らせタ」
「ありえない。わたしの身体は生まれつき凍らない。零下百度でも、血も唾も凍らないのよ」
「俺の氷なラ、おまえヲ、凍らせル」
「そこまで、わたしと差があるというの」
「おまえハ、苗床ニ、なル」
不気味な言葉の意味をアイスフォールが考える前に、マッシャーから生えている怪物の首に変化が起こった。氷の胴体から首が伸びたのだ。首の後に身体がつづいて出てきたのではない。キリンのように首だけが長く延長している。しかも蛇の胴体のように柔軟にくねって、内なる氷に束縛されたアイスフォールの肢体へ迫ってくる。
（き、気持ち悪い）
マッシャーの左胸から伸びた怪物の頭が、アイスフォールの顔の正面に来て、ゆらゆらと揺れた。

ギシャッ！

耳障りな声で吠えると、ろくろ首がかろうじて犬に見えていた外見を脱ぎ捨てた。白濁した眼球と眼球の間から毛皮が縦に裂けて、ベリベリと剥がれていく。下から現れたのは赤黒いなめし革のような皮膚だ。さらに皮膚の中から大小複数の眼球がボコボコと浮かび上がり、左右非対称の顔を作りあげた。

他の頭も同様に、変化をはじめる。

右の脇腹から生えた頭からは、ねじくれた鉤爪のような角が何本も突き出た。肩甲骨のあたりからぐるりとまわってアイスフォールに迫ってきた頭には、魚の鰭のようなものが何枚も現れた。蝿に似た複眼を回転させる頭や、くわがた虫に似た角を打ち合わせてカチカチと音を鳴らす頭もある。同じものはひとつとしてなく、どれもこれも奇怪な個性を声高に主張した。

（殺される！）

アイスフォールは確信した。眼前に並んだ怪物たちに、サージフェアリーが受けた陵辱などありえないだろう。生きたまま、鋭い牙で肉を噛みちぎられ、引き裂かれ、喰われて、どこにあるのかもわからない胃袋に収まってしまうに違いない。

「苗床ニ、なレ」

よく訓練された猟犬のごとく、怪物たちがいっせいに口を開けた。普通の犬から顎がはずれたと心配になるほど開いた。

（喰われる！）
戦慄しながらも、アイスフォールは自分の死をもたらす口から目をそらさなかった。スーパーヒーローとしてのプライドだ。できることなら、ひとりでも人質を解放して散りたかった。
ゴボッ！
と、怪物どもの喉が鳴った。喉の奥が蠢き、粘ついた音を連続させて、赤黒いものをどっと吐き出した。人差し指ほどの太さの、大型のミミズを思わせる触手が、喉の奥から何本も束になってあふれる。
アイスフォールは恐怖ではなく、嫌悪感に突き動かされて悲鳴を発した。
「きゃあああ！」
凶暴化したミミズの大群に町が襲われる映画を、ＤＶＤで見たことがある。ハイパワーガールスクールの生徒のひとりが、十代の少女のくせにゲテモノ映画マニアで、スクールのレクリエーションルームで上映したのだ。キャーキャーと黄色い声が飛び交う中で、画面全体を埋めるミミズの海の中でもがく男女をながめて、『俳優もたいへんだ』と感嘆したものだ。
テレビの中の光景が、自分の身で再現されようとしている。Ｂ級映画職人たちが低予算に苦しみながら描いた悪夢が、動けない身体の上で現実となる。
「ふあっ！」

思わぬ音色の声が自分の口から出たことに、アイスフォールは驚愕した。
細い触手の先端がコスチュームの上から突出した胸に触れた途端、予想もしない感触がはじけた。
（バカな、気持ちいいなんて）
目の前で蠢くグロテスクな怪物の触手と比較すれば、サージフェアリーを恥辱にまみれさせた木造ペニスですらまだましに思える。異世界のおぞましい生物に触れられて、気持ちよくなるはずがない。
頭ではそう考えても、実際に触手の先端が触れられる部分から、心地よいパルスが発する。首を下に向けると、青いボディスーツに包まれた挑発的な美巨乳全体が、うぞうぞと蠢く触手の束に埋まっている。男の目を魅了しないではおかないつんとした乳球の表面で、数えきれない触手が押し合いへし合いするたびに、コスチュームの中で心地よさが生まれる。
触手にコスチュームの上から胸をなでられても、肌を露出している脇に触れられても、感じる気持ちよさは変わらない。コスチュームの存在など、マッシャーの怪物たちの前ではなんの障害でもなかった。
「バカな。わたしはこんなことは、あっ！　ああっ！　うんっ……」
触手に嬲られているのは美乳だけではない。背後にまわった二匹の怪物の頭が、キュッと持ち上がった尻たぶの丸みに沿って、大量の触手を這わせた。二匹分の触手の束がウェ

ストをなでまわし、尻の谷間をねっとりとこすりたてる。
　ぶるっ、と尻が震えた。反応するまいと噛みしめた歯と唇の間から、不本意な喘ぎがあふれてしまう。
「うっ、んっ、んんん……」
　腹のまわりにはもっと多くの首が集まり、大量の触手をへその周囲から太腿まで這いまわらせる。
「や、やあ……」
　すぐに怪物たちは触手だけではがまんできなくなり、アイスフォールの肉体を奪い合いはじめた。先を争って角や棘をボディスーツに押しつけ、腹や内腿をつつく。恥丘の中心の溝をなぞって、とがった鼻先が何度も往復した。
「う、うっん、こんなことには、負けない……」
　触手にまみれたアイスフォールの身体中の肌で、次々と快感の卵が孵化した。皮膚の表面に生まれた快感は、虫の群れが木の皮を食い破り、幹の中に潜りこむように、体内へと侵入してくる。
（いけない。感じてはいけない。気持ちよくなってはいけないのに）
　手足を凍結されたアイスフォールは、敗北のポーズで立ちつくしたまま、端正な美貌を引きつらせ、胴体だけをくねらせている。溺れるほど大量の快感に煩悶するスーパーヒーローを、マッシャーが氷の眼球でにらんで告げた。

「おまえハ、男ヲ、知らないのカ」

抑揚のない極寒の口調では、処女であることが、よかったのか、悪かったのかもわからない。看破された通りアイスフォールは、いや、二十五歳の氷流沙良は一度の性の体験もなかった。

十六歳のときに、こみあげる本能と好奇心にうながされて、自分の手で身体に悦びを与えたことがあった。自宅のベッドの上で、充分に大きくなっていた胸をそっとさすり、乳首をつまんだ。たどたどしい愛撫だったが、はじめて味わう心地よさに、若い沙良は高々と舞い上がった。パンティの中に右手を入れて、自分の中にある濡れた部分の感触を知り、たちまち昇りつめた。

気がつくと、部屋の中が凍っていた。着ていたパジャマも下着もベッドのシーツも凍結して、沙良が動いただけで粉々に砕けた。天井も壁も床も氷に覆われていた。愕然として窓の外を覗くと、庭の地面が白く染まり、花壇の花々も凍っている。何頭もの蝶と二羽の雀が、凍死して地面に落ちていた。

庭をかこむレンガ塀の内側で凍結は止められて、幸いにも外の道路には被害をおよぼしていなかった。もう少し冷気が届く範囲が広かったら、知らないうちに近所の人々を殺していたかもしれない。

このとき沙良はアイスフォールとしてヒーローデビューして一年がたち、順調に成果をあげていた。ティーンヒーローとして名声を得ていた。自分のオフビート能力を完全にコ

ントロールできると信じきっていたのだ。
まさかエクスタシーとともに無意識に周囲を凍らせるとは、思いもよらなかった。自分の失態が信じられず、実験として周囲に動植物のない岩山で、何度も自慰をした。
結果はいつも同じだった。範囲はまちまちだが、快感とともに周囲を凍らせてしまう。いつもは完璧に制御しているパワーが、勝手に発動した。
沙良は決意した。スーパーヒーローの責務として、自分のオフビート能力で被害を出すわけにはいかない。もし男と交われば、確実に相手を殺す。
自分はセックスをあきらめなくてはいけない。
十六歳の決意は、九年がたった今でも強固な意志によって守られている。唯には新しい恋人を作れとアドバイスしながら、沙良はきっぱりと恋愛を捨てていた。ヒーロー活動とチームメイトやスクールの生徒との絆は、すばらしい充足を与えてくれる。それ以上、人生になにを求める必要があるだろうか。
女の肉体に起こる年齢相応の欲望は、ごくたまに周囲に危険を与えない場所で自撫をして晴らしてきた。
今、氷流沙良の生涯ではじめて、他人から官能の悦楽を与えられている。
（こんな悪党が、はじめての相手に……）
くやしい。くやしくてたまらないのに、身体は止めようもなく愉悦に蝕まれている。自身の指で行う遠慮がちの愛撫とはレベルが違う。セックスの経験がないからこそ、アイス

フォールは性の喜びは愛情の上に生まれるものだというイメージを持っている。自分の理想に反して、嫌悪しか感じられない邪悪な怪物の触手が、自分の身体から深く大きな肉の悦びを掘り起こしている。そんなことは認められない。認められないのに、気持ちよくてたまらない。

（くやしい！　くやしいくやしい、あああ）

脳が焼けつくほど憤っているのに、身体が反応しているのが自分でもわかる。触手の束に埋もれた胸が、悦楽の熱に炙られて、張りを増している。コスチューム越しに触手の先端につつかれて、乳首がいやというほど硬くなり、アイスフォール自身に向かって存在を主張する。

怪物の頭にかわるがわる嬲られる恥丘も、今までに経験したことがないほど充血して、ふっくらと盛り上がった。休みなく快感を撃ちこまれるクリトリスも、自然と分泌された体液に濡れて、大きく勃起しているだろう。

自分の身体が敵のおもちゃにされて、怒り、憎悪、嫌悪、苦悩、すべての不快な感情が頭の中で荒れ狂っているのに、身体は気持ちよくてたまらない。サージフェアリーもこの恥辱を味わっていたかと思うと、どうにもできなかった自分の不甲斐なさがたまらない。しかし、どんな感情も、肉体の快楽の増大を止めることはできない。

「はくうっ！　ふあっ、あああんっ！」

身体をほとんど動かせないことも、快感が体内に蓄積するスピードを速くした。少しで

も不本意な官能の熱を体外へ排出しようと、触手にまみれた巨乳を上下に揺らし、怪物の頭にたかられた腰をくねらせる。

わずかな抵抗も、すべて徒労にしかならなかった。容赦のない快楽が、二十五歳にして性に未熟な女体の限界を超えて、大きくあふれかえろうとする。

（ああっ、だめ、もう、果てる！）

九年ぶりの絶頂が、目の前に迫ってくるのが、はっきりとわかった。悩乱と懐かしさをともなって、目の前に自分が作る氷の世界にも似た白い光がチカチカと見える。まさしく氷流沙良の性感が限界を迎える前兆だ。

（敵に果てさせられる！）

『イク』という言葉は浮かばない。サージフェアリーと違って男との経験のないアイスフォールには、『イク』という表現のはしたなく淫らな響きがいやだった。

タブーとしてきたエクスタシーに、肉体を支配される。オフビート能力が暴走するだろうが、それすらもマッシャーに抑えこまれる。ただの人間としての絶頂を望んだこともあったが、もちろんそれはこんな状況ではなかった。

マッシャーの凍りついた声が、限界寸前の女体に吹きすさぶ。

「おまえは耕されタ。苗床ができあがっタ」

「んああっ！　もう、だ」

だめ、と口にしかけたとき、異変が起こった。

ふいに手足の関節を束縛していた凍結が消えるのを感じた。自由になるとわかった途端、アイスフォールは絶頂直前の昂りを無理やりに押さえつけて、うなじから両手をほどき、熟練の動きで身体をひねった。サージフェアリー以上に武術の鍛錬は積んできた。氷の長身に効果があるのかは疑問だが、得意とする蹴りをマッシャーに食らわさなくては気がすまない。

危険を感じとったのか、まとわりついていた怪物の頭がいっせいに離れ、マッシャーの氷の体表にもどった。全身の表面で蠢いていた触手の群れが、すばやく怪物の喉の奥へ縮む。全身で渦巻いていた不本意な快感が退いていく。

（やれる！）

確信したとき、突然両脚から力が抜け、軸足が崩れた。

「ふあっ⁉」

張りつめた胸や、硬く勃起したままのクリトリスではなく、腹の奥深くで快感が爆風のように広がる。闘うどころか、立っていることさえできなくなった。

「あああっ！　うっんん……」

蹴り倒すはずのマッシャーの前で、アイスフォールの身体は地面に倒れ、腹這いになった。さっきまでの触手の愛撫とはまったく違う、異常な快感が腹の奥で渦巻き、あまりの気持ちのよさに手足を動かす神経の流れが乱れている。

「くっうう！　こ、こんな、あああ！」

自慰のときに、膣口に人差し指を少しだけ挿入したことはあった。もちろん指は処女膜に届かないが、女性器の入口から奥へ向かう快感は知っている。だが新たに襲ってきた快感は、逆に子宮の中から膣へと進んでくる。子宮の中から、なにかが膣へ這い出しているのだと直感した。

「わたしの身体になにをした？　わたしの中に、なにが入っている？」

「俺の兄弟ノ、卵が孵っタ」

「卵っ！」

「兄弟ハ、おまえの腹を苗床にしテ、卵を産みつけタ」

「嘘だ！」

叫ぶアイスフォールへ向かって、マッシャーの体表から突き出た怪物たちが、そろって人間らしい表情を作った。他人の意志を無視して思い通りに支配する者が、哀れな犠牲者へ送る傲慢で凶悪な満足の笑みだ。おまえがどう考え、いかにあがいても、おまえは俺のものだ、という笑顔だった。

アイスフォールはマッシャーと怪物たちへ反論した。しないではいられなかった。

「違う。おまえたちの触手は、わたしの体内には入ってこなかった！」

「卵は触手の先カラ、おまえの腹の中ニ、直接飛んダ」

「今まで、そうやってきたのか。罪もない女性を、怪物の食い物にしてきたのかはあああうっ！」

アイスフォールが冷たい地面にへたりこんだ。膣の中で敵の子供が蠢き、熾烈な快感で言葉を削りとられた。
マッシャーが満足げに宣告してくる。
「祝うがいイ。おまえが兄弟を産ム」
「そんなことは、絶対にありえない！」
真実を告げられたとわかっても、妊娠どころか受精すらしたことのないアイスフォールは、自分の子宮に見知らぬ生命が巣食っていることを否定した。否定しないではいられなかった。
「ありえるはずがなあひいいっ！」
地面に膝をついていた両脚が、電気を流されたようにピンと伸び、尻が勢いよく跳ね上がった。背中に乗っていた純白のケープが、身体の横にずれ落ちる。
「あふっ！　あああああ、中を、ひいっ、膣の中を、動いてる！　ひいいい！」
膣をいっぱいにして、細長い怪物の幼体がうねうねと進む。体内で蛇がくねって、内臓をかきまぜられているようだ。どれほど性体験が豊富な女でも一生味わうはずのない刺激が、未経験の肉体に凄まじい悦楽の嵐を呼んだ。いきなり膣の奥を広げられれば痛くて当然なのに、快感だけしかない。寄生した怪物の魔力で、感覚を狂わせられている。
「ひきいっ！　ひあああああっ！」
青いコスチュームに包まれた尻が、上下左右に揺れ動いた。伸ばした太腿の筋肉がつっ

ぱり、ふるふると震えた。頭の中は異世界の怪物に寄生された嫌悪で満ち満ちているのに、肉体は快楽に敏感な反応をくりかえす。自慰で感じていた気持ちよさなど、今の身体の奥底からあふれだす非情な愉悦の大波の前では一滴の雫のようなものだ。

（このままでは！）

止まらない快楽の中で、アイスフォールはあまりにもおぞましい事態が待っていることに気づいた。

（あああ、このまま、怪物の子供が進んだら……）

膣の中を進む怪物の幼体によって、処女膜を内側から突き破られてしまう。一生に一度の女の儀式が、想像を絶する悪夢と化すと気づいても、止める方法がない。文字通り人外の官能に狂わされ、でたらめなリズムに乗って尻を振りたてながら、悲劇の瞬間を待つしかなかった。

「ひいっ！」

あふれる快感でぐずぐずに蕩けていた下半身に、はじめて苦痛が走った。永遠につづくと考えていた少女の時間の終わりを告げる痛みが、最悪の状態で訪れたのだ。

「あああっ、破られるっ！　いや！　いやああっ！」

引きつった美貌を左右に打ち振って、十年のキャリアを持つスーパーヒーローが幼い子供のように叫んだ。体内の激痛が増大して、意地やプライドなど保っていられない。超人的な肉体の強靭さを誇る他の女性ヒーローたちは、処女喪失が痛くなかったのだろうか、

という思いが脳裡にまたたいた。
コスチュームの二つのレッグホールから、同時に鮮血が流れ出し、両脚を伝って氷に覆われた地面に赤い模様を描いた。
「ああっ、血が！」
と叫んだのは、となりのミニドームから見つめていたライトガールだった。マッシャーの声が聞きとりづらいのもあって、先輩の身になにが起きているのか、後輩からはわからない。幼いころからスーパーヒーローにあこがれてきたライトガールにとって、自分が目標とするヒーローが血を流すなど考えられなかった。ましてや体内から処女幕を破られているなど、誰に想像できるだろうか。
「氷流先生！　どうしたんですか！　どんな傷をつけられたんですか！」
不安に駆られた後輩の呼びかけが耳に入ると、アイスフォールは苦痛を振りはらってとなりのミニドームへ顔を向けた。
「し、心配しないで、ライトガール。すぐに、こんな奴は倒してやるから」
「そうダ。安心しロ。苦痛はなくなル」
マッシャーの言葉に、身体中の怪物の口が不快な嘲笑の鳴き声を合唱する。
アイスフォールのコスチュームの濡れた股間部分が、いきなり盛り上がった。
「ふああっ！」
尻が高く跳ね上がる。ちょうど女の恥ずかしい部分をライトガールに見せつけるような

姿勢になり、異変が後輩の目に映った。レッグホールの間の布が内側から押し上げられ、グリグリと蠢いている様子が、大勢の人々に見られた。

「ひ、氷流先生、なんですか、それは⁉」

「はっあああ！」

答えた声の音色が、はっきりと苦痛から別のものに変化していた。処女を踏みにじられる激痛を訴える声が、甘い喘ぎにもどっている。

（き、気持ちいい……）

怪物の幼体が処女膜を越えて前へうねり進むにつれて、痛みは消え、快感が復活した。股間のふくらみの蠢きに合わせて、尻がせわしなく振られる。

「おっ、おああ、こんな、こんなことは、ああああ」

コスチュームの盛り上がった部分に、切れ目が走った。耐久性にすぐれた布が内側からやすやすと引き裂かれ、濡れた青い布きれが脚の間にびちゃりと落ちた。コスチュームを破られたサージフェアリーと同じく、尻の大部分からへそまでが露出してしまう。

「う、うわああっ！　そんなの嘘だ！」

またライトガールが叫んだ。ミニドームをかこむ老若男女も目を丸くして、驚愕の声を合唱させる。新大阪城ホールにドラゴンが現れてから、最大の驚きかもしれない。

四つん這いのアイスフォールの膣口が限界まで押し広げられて、大きな蟲が顔を出していた。芋虫に似ているが、女性器から出ている長さは三十センチあまり。太さはサージフ

ェアリーを襲った木製ペニスと変わらない。むっちりとふくらんだ体の表面には、丸いイボのような突起が不規則に並んでいる。
スーパーヒーローの女の部分から体をもたげて、蛇使いに操られるコブラのようにゆらゆらと揺れる奇怪な姿は、どう見ても地球上の生物ではない。
蟲がうねるたびに、突起だらけの丸い体に大きく広げられた肉唇がひくつき、秘部をあらわにした尻が痙攣するようにくねる。前の口からは、すすり泣きにも似た声が流れ出た。
「あんっ、はああっ、な、なにが、わたしの中から、出てきたの」
首を後ろへねじったアイスフォールの目に、尻の向こう側でうねる怪蟲のおぞましい姿が入った。
「な、なに……」
グロテスクな芋虫の化物が、自分の女性器から出てきていると思いいたり、悲鳴がほとばしった。
「ひいいいいいいっ！　いっやあああっ！」
絶望的な汚辱感にまみれて、気が狂いそうになる。外見は昆虫の幼虫にしか見えないものが、獣じみた怪物の子供なのか、という疑問は微塵も浮かばない。一秒でも早く、自分の女の部分から怪物を引き剥がさなくてはならない。悲鳴をあげながら身体をひねり、右手を股間へ伸ばした。
「ひいいっ！」

『第六章　妖精たちの肉の罰』より

　それらは大阪城公園を封じる巨大ドームの中をゆっくりと旋回飛行するドラゴンたちのミニチュア版だ。姿形は同じだが、サイズははるかに小さい。とはいえ胴体だけでも、虎やライオンに匹敵する体長だ。その前後に棘だらけの長い首と尾、さらに背中からは蝙蝠状の翼が広がっているのだから、巨大すぎるドラゴンよりもリアルに猛獣を感じさせる。
　そんな怪物が十匹あまりも、ホールの中を好き勝手に飛びまわっては、鼓膜を引き裂くような声で鳴き交わしているのだから、ホールに集められた人々が全員蒼白な顔色であっても不思議はなかった。ただひとりブックメーカーを除いては。
「いかがですか、ドラゴンの雛は。なかなか愛嬌があってかわいらしいものでしょう。私は繁殖させてペットとして売ろうと考えているんですよ。そのためにも雛ドラゴンたちを育てるために、ここで餌を与えてやらなくてはなりません」
「餌とは、まさか！」
「オスドリゴル大帝国産のドラゴンは成熟すると自然のエネルギーを直接身体に吸収するので、食料は必要ないそうですが、雛のときには動物性蛋白質を食べなくてはならない。今も雛ドラゴンたちは待っているのです。私がひと言、食べていいと言えば、ホールに集めた餌に飛びつくでしょう」
　そう言いながら、ブックメーカーの手はサージフェアリーの背後を指し示した。そこには身を寄せ合って震える五十人の姿がある。
「そんなことは、絶対にさせないわ！」

サージフェアリーが力強く宣言したが、今の自分の言葉がなんの説得力も持ちえないことは痛感していた。いつもなら見守る人々から歓声があがる場面だが、今はスーパーヒーローを見つめる顔には不安と、それ以上に絶望がありありと表れている。

（わたくしは一度、皆の前で犯され、恥をさらしてしまった）

自分の身体に目を落とすと、張りつめた胸と強烈に勃起した乳首しか見えない。不気味な静脈が走るコスチュームから、膨張した二個の乳房があふれている。もともと豊満だった乳球はひとまわりもふたまわりも大きくなり、自分の下半身を視界から隠している。

しかも胸全体に自分が放出したミルクと、アイスフォールにかけられた精液が胸やコスチュームの上に広がり、微妙に異なる白さのまだら模様を作っている。顔も髪もベタベタだ。

（今も両手を拘束されて、こんな肉体にされてしまった女を、誰もスーパーヒーローなどとは思わないわ）

サージフェアリーの沈んだ顔と人々の恐怖に歪んだ顔を見比べて、ブックメーカーの声がますます陽気になった。

「さて、餌の皆さん、すでに説明した通り、われらがサージフェアリーはバラガン殿下より賜った変容の首輪によって、オフビート能力を失っています。偉大なるスーパーヒーローにはもはや雛ドラゴンの一匹とも闘う力がないことは、一般人である皆さんと同様なのです」

あらためてダメ押しの言葉を聞かされて、人々からうめきが漏れた。
「しかしながら皆さん、安易に希望を捨ててはいけません。たとえ戦う力を失っても、なお身を挺して大勢の人を救うのがスーパーヒーローというものです。サージフェアリーにもまだ皆さんが食い殺されるのを防ぐ手段があるのです！　それは」
いきなりブックメーカーがサージフェアリーの背後にまわり、両手で膨乳を容赦なしにつかんだ。今の肥大乳房はとても男の手で覆いつくすことはできない。左右の下乳に合計十本の指を食いこませるだけだ。
「あひいいいいっ！」
鮮烈な快感が、胸で炸裂した。頭をのけぞらせるサージフェアリーの乳首が上向きにそそり立ち、二筋の白い線を空中に描いた。二メートルあまり先に母乳が落ちて、甘い香りを放つ水溜まりを作った。
ギョア！
ギョア、ギョアア！
ホールに響く雛ドラゴンの鳴き声が、いっせいに音色を変化させた。それまでのどこか動物の子供が遊んでいるような鳴き声が、餓えた獣のものになる。
十匹の雛ドラゴンが次々と翼をたたみ、屋根から落ちてきたガーゴイルの石像のように床に着地した。いきなり凶暴な体重をかけられて、床がきしみの悲鳴をあげ、振動が怯える人々にも伝わった。

雛ドラゴンの口が大きく開き、刃物を植えたような牙の列の奥から、カメレオンに似た細長い舌を伸ばした。舌の先端が争って、床のミルク溜まりに殺到する。

サージフェアリーは雛ドラゴンの舌が透明で、中が空洞になっていることに気づいた。床に広がった母乳の面積がみるみる縮小して、舌の中を白い液体が上昇していく。

自分が放出した異世界の母乳を貪る雛ドラゴンを唖然と見つめるサージフェアリーの前に、ブックメーカーがフリルをひらひらさせて立った。

「もうおわかりでしょうね。雛ドラゴンの一番の好物は、変容の首輪によって女の体内で製造される特別な母乳です。オスドリゴル大帝国にあるバラガン殿下の居城では、たくさんの女たちが変容の首輪をつけて、雛ドラゴンを育てているそうですよ。すばらしいではないですか」

「ようするに、わたくしにこの怪物たちに授乳しろというのね」

覆面に描いたサイコロがくるくると目を変え、口調が哀れを誘う音色を帯びた。

「餓えた雛ドラゴンのためのささやかなお願いです。サージフェアリーに断られたら、かわりにそこの人たちを、雛ドラゴンに食べさせてやらなくてはならないのです。ほら、こうして」

ブックメーカーが右手をひらりと動かすと、たくさんいる兵士のひとりが剣を投げ捨てて、行進するようなきびきびした足取りで雛ドラゴンへ近づいていった。

「待ちなさい！　止まって！」

思わず声をあげるサージフェアリーの制止は、支配者の人形である兵士には届きもしない。たくましい筋肉をまとった両腕を、怪物の子供たちへ差し出した。
「ブックメーカー、あの人をやめさせて！」
二匹の雛ドラゴンが同時に、腕ではなく肩に噛みついた。筋肉と骨が破壊される凄まじい音を鳴らして、兵士の肩のつけ根から両腕がもぎとられた。鮮血が飛散して、兵士と雛ドラゴンと床を染める。怪物はせわしなく口を動かして、口から突き出していた巨漢の腕をあっという間に呑みこんでしまった。
両腕を失った兵士は、とことんまで人間性を奪われているのか、それとも最初から持っていないのか、ひと言も声を出さないで床に倒れた。
「はい、撤去して」
ブックメーカーが右手を振ると、盛大な血溜まりだけを残して、悲惨な兵士の姿が消失した。どこかへテレポートさせられたのだろう。
「なんて惨いことをするの！」
サージフェアリーの怒声も、無慈悲な犯罪プランナーを面白がらせるだけだった。
「地球人が気にすることはないですよ。兵士たちはバラガン殿下の所有物です。いくらでも補充できるんです。でも次に餌になるのは異世界の兵士ではなく、地球の一般庶民です。今度は心臓も脳も残さずに食べさせるから、気をつけてくださいよ」
もはやサージフェアリーに言えることは、ひとつしかなかった。

「今のわたくしにできることは、なんでもするわ」
「けっこう、けっこう、じつにけっこうです。では手枷と足輪をはずしてさしあげます。念のために言っておきますが、手が自由になったからといって、変容の首輪をはずすことはできないですからね。首輪をはずせるのはバラガン殿下だけです」
ブックメーカーが手枷と足輪をはずすと、サージフェアリーはさっそく首輪に指をかけて引き剥がそうとした。外見通り生肉に似た柔らかい感触だが、びくともしない。つなぎ目のような部分もなかった。首輪の急所と思えた喉の眼球も、防弾ガラスのように硬い。
フェアリーブレイズを使えないのでは、ここで抵抗して闘っても、誰ひとりとして助けられないだろう。
サージフェアリーは意を決して、雛ドラゴンたちへ足を進めた。
グル！
グルグルウ！
雛ドラゴンたちが喉を鳴らした。鼻の穴をふくらませ、赤い火がそこかしこで噴き上がる。食料を待ちきれずに、今にも口からいっせいに炎を吐きそうだ。
「さあ、早く、自分の手でミルクを搾って、飲ませてあげて」
（自分でミルクを搾れだなんて、それではわたくしに自慰をしろをいうの）
逡巡するサージフェアリーに、ブックメーカーの声がしつこく追いすがった。
「さもないと、全員が丸焼きになります。ああ、怖い、怖い」

（わかったわ）
声には出さずに、サージフェアリーは両手で自分のものではなくなった乳房にそっと触れてみた。
「んくう……」
自分の指と掌が触れただけで、重い乳房の内部で熱い母乳がぐねぐねと渦巻いた。胸の中がどんな構造になっているかわからないが、熱ミルクが動くだけで人智を超えた快感をもたらし、サージフェアリーの歩みを乱させる。
たまらず足を止めてしまうと、ブックメーカーが皮肉な声をかけてきた。
「雛ドラゴンたちにやさしい言葉をかけてあげてください。デリケートな動物なんですから、ストレスを与えると、誰かれ構わずに喰いちらかします」
（どう考えても、そんな必要はないわ。でもフェアリーフォースのパワーを封じたからには、人質を生かしておく実質的な理由はない。ただわたくしたちの負担を増すためだけに、皆を生かしているだけだわ。だからブックメーカーは平気で皆を殺す）
サージフェアリーはサイコロ覆面を一度にらんでから、もう一度自分の胸に触れた。
「くうっ！」
また母乳が対流して、爆乳を内側から狂わせる。全身を蝕み、歩調を乱す乳悦に耐えて、今度は手を離さなかった。
「……こ、これから、雛ドラゴン様のために、わたくしサージフェアリーが母乳をお出し

します。どうぞ、たっぷりと飲んでくださいませ」
「おお、いいですね。そんじょそこらのクソ生意気な世間知らずのスーパーヒーローと違って、さすが社長を務める人は接待をわかっていらっしゃる」
（人命を護るためなら、道化を演じるくらい、たやすいことだわ。でも、胸が……）
「……ああ、あ」
両手を当てているだけで、忌まわしい超巨乳にわだかまる快感が大きくなり、炎で炙られているように母乳がぐつぐつと煮立っていく。
（わたくしの身体が、改造された乳房に侵蝕されている。母乳が血管を通って、身体中に広がっているみたいだわ）
変容の首輪の魔力が発揮されてからたいして時間がすぎていないのに、すでに抜き差しならないところにまでサージフェアリーは追いやられていた。なんの刺激も与えられなくても、胸は悦楽を訴えて、意識を蕩かしている。本当に母乳を出したらどうなるのか、想像もつかず、戦慄が走る。
決意するために、サージフェアリーは口に出さなくてはならなかった。
「ミ、ミルクを出すわ」
ブックメーカーにやられたように、下乳を強く握った。指が極上の柔らかさを持つ乳肉にめりこむ。
「あっ」

乳輪が大きく盛りあがり、乳首の先端がうねった。複数の母乳の出口がある本来の乳腺と異なり、サージフェアリーの変異した胸には、男の尿道のように乳首の中心に一本の太い乳管がある。

左右の乳管が同時に広がり、肥大した勃起乳首の中を猛烈な勢いで母乳が駆け抜けた。自分のミルクで乳首の内側をこすられる快感は、男の射精よりもはるかに大きかった。

「あっおおおおおおおおうっ！」

意識が真っ白になる。自分の脳そのものが一気に溶解して、母乳と化して乳首から噴出したとしか思えない悦楽に、思考力が奪われてしまう。

「おおおおっうおおお、イクううっ!!」

たった一回の射乳で、サージフェアリーは胸だけの絶頂を迎えた。愛する人とたいせつなものを与え合い、お互いに分かち合い、心から満ちたりる歓喜と正反対の快楽。心の充足などなにもない、それゆえに純粋な肉体だけの快感が、勃起乳首と膨張爆乳から全身へ駆けまわり、いとも簡単に大人の女を絶頂へと押しやった。

正にスーパーヒーローを腐食する快楽の猛毒だ。

「あああああ……あ、んん……」

母乳の放出が止まり、魂を削られるほどの快感が薄れた。弱まったとはいえ爆乳の内部にはまだ悦楽がうねっている。乳首の勃起はまったく収束しないで、わななきながら先端から白い雫を垂らした。

だが、一度目の絶頂ははじまりにすぎなかった。

十匹の雛ドラゴンたちの口から、十字砲火のごとく透明な舌が飛んだ。先を争って飛来してくる舌のうちの二つが、ほぼ同時に左右の乳房に貼りついた。舌の先端がお椀のように広がり、乳首を中心にして巨膨乳の半分にぴっちりと吸着した。

「ひあっ」

舌に貼りつかれただけで、柔軟な乳肉がふるふると揺れて、重い悦びがサージフェアリーをたたいた。

「ふああ！　も、揉まれる！　胸を、怪物の舌で揉まれてるわっ！」

雛ドラゴンの舌先の動きは、蛸の足の吸盤か、あるいは獲物を傘全体で包みこむ種類のクラゲにそっくりだ。人間の手には不可能な吸着力で、うねうねと二個の爆乳球を揉みしだく。

「ふあっ、はあああ、こんなことおお……」

乳房を取られた八本の舌が、次々とサージフェアリーの身体に強引にまとわりついた。両手に舌先がとりつき、手首まで呑みこまれる。コスチュームの腹や背中や太腿にも吸盤状の舌先がべったりと貼りついて、皮膚やコスチュームを破る勢いで吸引した。なにより股間に密着した舌によって、コスチューム越しに濡れそぼった女肉を引きずり出されそうになる。

だが全身を襲う舌の異様な感触も、改造巨乳を吸われる激烈な快楽の前には幻でしかな

い。
サージフェアリーは透明な舌の中での、自分の乳房の変化を見せつけられる。乳肉を覆う舌の圧力で、形のよい乳球が前へ引き伸ばされた。ひしゃげた乳肉の先端では、勃起した乳首が吸いあげられて、よりいっそう長くなっている。
女の急所に対する凄惨な虐待も、今のサージフェアリーには甘美な愛撫だ。乳房になにをされても、快感しか発生しない。すべての刺激が射精絶頂を発動するための燃料だ。
「ふあああ、出る！　また、ミルク出るううっ！」
透明な舌の伸びた乳首の先端がまくれて、乳管の粘膜があらわになる。
純白の爆発が意識を吹き飛ばし、二本の乳首から大量の母乳が放出された。
「はっおおおう！　出るう、イクっ！　イクイクイク、胸でイクうっ!!」
透明な吸盤の内側に白い液体がぶつかり、ホース状の舌の中を流れていく。自分で胸を搾ったときと違い、ライオンよりも大きな赤ん坊に授乳している。後から後から母乳を吸い出されて止まらない。サージフェアリーは絶頂が延々と続いて、快楽の高みから降りてくることもできなかった。
「あああおおおお、止まらない、とまらなひい、イクうっ!!」
母乳を吸い取られるとともに、手足から力を奪われた。大きすぎる快感のために筋肉が弛緩して、立っていられなくなる。くたくたと床に尻をついたサージフェアリーの胸から、満足した雛ドラゴンの舌が離れた。解き放たれた乳首から、吸引された勢いのままに母乳

が飛び散る。
「はあああ……あくううっ！」
解放されたと思う間もなく、腹にとりついていた二本の舌が左右の胸に貼りついた。餓えた雛ドラゴンが強烈に爆乳肉を搾り、乳首を吸いつづける。
「ふあおおおおっ！　また、またイクううっ！　イックううううっ!!」
再びとぎれのない授乳絶頂がはじまる。
かすれる意識に、目の前で順番を待つ雛ドラゴンの姿が映った。まだ六匹いる。
（あああ、あと六匹も……いえ、六匹耐えれば、この恥辱も終わるわ……ああっ、そんな！）
希望はすぐに打ち砕かれた。天井の穴から次々と、新たな雛ドラゴンのシルエットが飛びこんできた。最初の十匹がすべて終わるまで待つつもりなのか、新入りはホールの天井近くをゆったりと旋回しはじめた。
いったい何匹が入ってきたのか、もはや凶悪な授乳の悦楽に蝕まれたサージフェアリーには判断できなかった。一桁の数も計算できなくなっていた。
「はっおおおおおおう！　イク、イッちゃう、ミルクでイクのうううううっ!!」
「さて、ここはもういいですね。次のショーにかかりますから、私はこれで失礼します」
ブックメーカーが、サージフェアリーに深々と頭を下げた。
雛ドラゴンの群れにかこまれて、母乳を吸われ、涎を垂らし、コスチュームを愛液でぐ

しょぐしょにしたスーパーヒーローの耳には、誰の言葉も入らなかった。ミルクを吸われる快楽で五感のすべてを塗りつぶされている。

「雛ドラゴンはまだまだたくさんいますから、たっぷりと楽しんでください」

ブックメーカーはくるりと身体をまわし、サージフェアリーの悲惨な恥態を見守るしかない五十人にも頭を下げると、ホールから消失した。

＊

アイスフォールがオズノルガ城の広間から、ブックメーカーに連れられてテレポートで運ばれてきたのは、サージフェアリーが悩乱しつづけている新大阪城ホールに隣接する野球場だった。

アイスフォールもまた一度ははずされた手枷を、再び後手にはめられている。コスチュームの股間の穴からは、萎えることを知らないペニスがそそり勃っていた。

自分のまわりに大勢の人々がいることに気づいて、アイスフォールは近くにあったものかげに飛びこみ、恥ずかしすぎる姿にされた肉体を隠した。

ブックメーカーが両手をひらひらさせて、周囲の者たちに聞こえる大声で呼ばわった。

「おや、アイスフォールさん、心配はいらないですよ。ここにいる人々には、あなたに肉棒が生えたことも、あなたがオフビートパワーを失ったことも、ちゃんと教えてあるんですから」

（知られていても、恥ずかしさが消えるわけがない）

『第七章　フェアリーフォース・インフィニティ』より

サージフェアリーの問いにも、アイスフォールは答えられない。陸にあげられた白魚のように、チームメイトの上でのたうつばかりだ。

「はああっ、あ――、ひ――いいい――！」

一度バラガンに従属した肉体は、アイスフォールの抵抗の意志を無視して、ひたすら支配者から贈られる喜悦を貪り、呑みこんでいく。恐ろしいほどの短時間で、氷のスーパーヒーローは仇敵に点火された魔悦に身を灼く、炎の人形と化していた。

「余の魔力は三つに分裂して、別々の時代へ出現した。ひとつは地球の時間で二十五年前の極低温研究所で事故を起こして、妊娠中の女の腹の胎児に宿った。そうしてパワーを持って生まれたのがアイスフォール、おまえだ！」

バラガンの腰がひときわ猛々しく、アイスフォールの尻にたたきつけられる。

「ひいい――いい――っ！」

女体を支配する肉の大剣が、子宮を突き破り、脊髄を粉砕し、脳を貫いた。アイスフォールは快感の斬撃にまっぷたつにされ、絶頂へ向かって落とされた。それは今までの高みへ飛翔する感覚ではなく、奈落の底へどこまでも墜落していく快感だ。

「あああ――あー、うっんーん――ああ――」

絶頂の底へと到達する寸前、バラガンのペニスが引き抜かれた。凄まじい勢いで膣粘膜が外側へまくられ、失禁かと見えるほどの愛液がライトガールとサージフェアリーの股間を濡らした。

「あぁ――あぁ――ぁ」
バラガンに去られたアイスフォールの肉の中には、大きな空洞ができた。身体中のすべてが、空虚な大穴を埋めてほしいと訴える。今すぐ支配者のペニスで貫かれ、空虚を埋められたい。殿下から絶頂を賜らないと、発狂して死んでしまう、と肉体が悲鳴をあげて懇願する。
「違う！　わたしは、そんなことなど、望まない！」
アイスフォールは自分へ向けて叫んだが、肉体に拒絶されてしまう。アイスフォールという人間を支配しているのは、意志ではなく肉体だと宣告される。
アイスフォールの苦しみを無視して、バラガンは膝を曲げて、ペニスの照準を下に横たわるサージフェアリーへ向けた。
「やめて！　絶対にいや！　おまえだけは絶対いやぁ！」
「もうひとつの魔力は、七年前の湖に出現した。不破正を次元の裂け目に呑みこみ、不破唯の身体に宿った。そしておまえはサージフェアリーとなったのだ！」
サージフェアリーの花唇を貫き、野太い肉槍が未亡人を貫いた。体内から恐慌が広がり、偉大なスーパーヒーローを狂乱させる。
「いや！　こんなのいやぁ！　助けて。正、助けて！　お願い、正、唯を助けて！」
「不破先生！」
しっかりしてください、とはライトガールには言えなかった。目の前で泣きわめくサー

ジフェアリーの吐息が顔にかかった。日本でも有数のスーパーヒーローが、数えきれない人命を救い、数知れない犯罪者を捕らえ、すべての人々から信頼を受けるサージフェアリーが、死んだ夫に助けを求めている。不破唯を慕い、フェアリーフォースの一員になることを目標としてきたライトガールには、信じ難い姿だ。

「不破先生、ボクは……」

ライトガールの言葉は、陵辱者の哄笑にかき消された。

「死人になにを言っても無駄だ。サージフェアリーのすべてが、余のものとなるのだ」

「あ、あああ、奪われる。わたくしの力が……わたくしの、わたくしの……いやあ」

異界の猛毒が膣粘膜からサージフェアリーの全身へと広がっていくようだ。広げられた股間が上下に動き、意志を無視してバラガンの勃起をしゃぶっている。

頭の中では憎悪と復讐心がたぎっているのに、身体がバラガンになじんでいく。正への思いが、肉棒が前後するたびに削りとられ、奪われていく。

そして失われたものを埋めるために、快感の大波がサージフェアリーの全身を浸した。

「はおおおうっ！」

上に乗ったライトガールを投げ飛ばす勢いで、腰があがった。絶頂を迎えていないのに、巨根に広げられた膣口の隙間から大量の愛液が噴出する。膣だけでなく身体中の神経に、赤熱した針を刺されたようだ。

性感帯を物理的に刺激されているだけではなく、はっきりと魔力による支配を感じたが、

今のサージフェアリーにはどうにもできない。ひたすら犯されつづけて、身悶えるだけだ。
「くううっ、ああおおお、助けて、たすけてえああ」
バラガン殿下から与えられる肉の愉悦以外は、自分にはなにも必要ないと刻みこまれる。DNAレベルで、身体をスーパーヒーローから牝奴隷へと書き換えられていく。
「あおおおう！　いや、わたくしは、わたくしは、妻よう、正の妻よおほほおおう！　正っ、正正正しいひひいいいいっ！」
亡夫の名を叫びながら、快楽の深遠へと落ちていく。底なし沼の底にある絶頂へと、際限なく沈んでいく。
「だめ！　だめええ！　ほおおおおおう！」
暗黒の底の暗黒に手が届きそうになったとき、また勃起が抜かれた。盛大に愛蜜をしぶき、ライトガールの下半身を濡らしながら、絶頂に届かない。目の前に底が見えながら、それ以上は沈めなくなった。
（これでいい。これでいいのよ。バラガンにイカせられるなど、ありえないわ）
頭ではそう思っても、肉体が反逆している。バラガンからとどめをさされることを欲して、開いたままの肉孔がわななき、愛液をとろとろと湧出した。
「そして残ったもうひとつの魔力は、はるか数千年の時間をさかのぼり、古代の宝石に宿った。魔力を帯びた宝石は人の手を転々として、ついには小娘の手に渡った。それがライトガールの体内にある赤い宝石の正体だ」

背後から聞こえてくる侵略者の言葉を、ライトガールはきっぱりと否定した。
「嘘だ！　ボクをオフビートにしてくれた正義のルビーが、おまえみたいな極悪人の魔力で創られたはずがない！」
「おまえたち三人がフェアリーフォースとしてチームを組んだのも、偶然ではない。おまえたちの身体に宿る余の魔力が、ひとつになろうとして、おまえたちを集めたのだ。すなわちフェアリーフォースは余が創ったのだ」
「バ、バッ、バカなことを言うな！」
「フェアリーフォースを捕らえたのも、余の魔力を取りもどすためだ。昨日はめた変容の首輪の本来の役割は、おまえたちの肉体から魔力を吸収し、余にもどすためのものだ」
「嘘だ。さっきもオフビートパワーを全開にして闘えた！」
「先刻の闘いが最後の輝きだ。もはやおまえたちの身体には、ほとんど魔力が残ってはおらん。今から魔力の最後の一滴まで、搾り取ってくれよう」
バラガンが指を鳴らした。三段重ねにされたフェアリーフォースの身体がアスファルトに投げ出される。サージフェアリーの両腕を左右からライトガールとアイスフォールがつかみ、互いに支え合うようにして立ち上がり、侵略者と向かい合う。
周囲をかこむ人々から嵐のような声援があがる。世界中のどのスタジアムでもこれほど熱く、懸命な声援は聞かれないだろう。誰もがフェアリーフォースの勝利を願っていた。
だがバラガンの落雷のごとき一喝が、声援をたたきつぶす。

「あきらめろ、虫けらども。今よりフェアリーフォースが最後の力を失うさまをしかと見とどけ、絶望を味わうがよい」
武骨な亀頭を獰猛に振りたてて、堂々と呼ばわった。
「さあ、余の牝奴隷ども、肉棒が欲しければ、尻を向けよ」
「あ……ああ……」
「か、身体が……」
サージフェアリーとアイスフォールが足をふらつかせて、身体をまわした。ライトガールも引きずられて尻をバラガンへ向かせられる。
「不破先生、氷流先生、どうしたんですか⁉」
アイスフォールが青ざめた顔に汗を浮かべて、首を振った。
「だ、だめなの……身体が言うことを聞かない……バラガンの魔力に支配されている……」
サージフェアリーも涙を流しながら、両手をわななかせた。
「身体が、わたくしを裏切っているのよ……正を見捨てたのよ……はおう！」
「あひいいっ！」
二人の女性器に、同時に亀頭が突き刺さった。親友である二人が憔悴した顔をブルッと振り、肉唇が喜々として太い肉刀を呑みこんでいく。
「はああ――ああ――」
「あおおおおう」

二人の先生のよがり声を聞かされ、ライトガールはあわてて背後に目を向けた。
バラガンの巨岩のごとき下半身から、三本のペニスが生えている。しかも太さはもともと同じだが、はるかに長い。男性器というより触手だ。二本はすでにサージフェアリーとアイスフォールを貫き、犯している。
そしてもう一本が、ライトガールの股間を狙って伸びてきた。
「くそっ！」
ライトガールは逃げようとするが、サージフェアリーに腕をつかまれて、離れられない。わざと捕まえているのではなく、触手ペニスに責められて無意識にライトガールにすがりつき、蔓のように腕をからめていた。
「不破先生、負けないで、ひいいっ！」
少女の剥きだしの股間に、亀頭が押しつけられる。凶悪な熱さが、未踏の肉唇を焼く。
「ライトガールよ、おまえこそが余の魔力を最も色濃く宿している。もしも将来があれば、おまえこそがフェアリーフォース最強の戦士となっていただろう。だからこそ、おまえを最後まで残しておいた。おまえの処女を奪って、余の計画の完成としよう」
「いやだああっ！」
足を踏み出す間もなく、なんの前戯も愛撫も与えられずに処女膜を突破された。
「あああああああああああっ！」
昨日デビューしたばかりの新人ヒーローの悲鳴が、人々の耳をつんざいた。硬直する少

女の脚の間から、赤い鮮血がしたたる。
その瞬間、ライトガールはバラガンの魔力の奔流に囚われた。処女を失ったばかりの身体から激痛が消し飛び、身体が破裂するほどの快感が充満する。ライトガールは自分からサージフェアリーの身体にしがみつき、小さいながらに張りつめた胸を、リーダーのパンパンにボリュームアップした豊乳へ押しつけた。自分の身体が自分でなくなり、無意識に胸に刺激を与えないではいられない。
「うっああ、んん、ふ、不破先生、ボク、ボク……」
「おおおおう、光、ひかりい、た、たまらないい……おおう」
敵の魔力によって感度を増した乳首同士がぶつかり合い、鮮烈な甘さを生む。
左側のアイスフォールも体内のペニスに操られるままに、前にせり出した胸を、親友の乳房の側面にこすりたてた。熱く摩擦する乳肌から、二人の間に甘美な静電気が走る。
「はっおおおおう！　沙良、それ、んんんん」
「ふああ――ああー、ゆ――い――、胸がああ――――」
自分たちが、救うべき大勢の人々の前にいることもわかっている。自分たちが敵に犯されていることもわかっている。それなのに快感に身をゆだねずにはいられない。
奇怪な肉棒に犯されながら、互いに抱きしめ合う三人の周囲に、新たな亀頭が出現した。バラガンの背中から新たな触手ペニスが何本も生えて、蛇の大群のようにフェアリーフォースの身体に群がった。先端の鈴口で舐めまわすように、熟した女体をなぞり、溌剌とし

た若い身体をこすりたてる。
亀頭の群れに触られるだけで、その部分が性感帯と化したように喜悦が発生した。
「ふあっ！　はひいい！　先生いっ！」
六つの乳首が、それぞれ亀頭の先端でドリルのように乳房に押しこまれる。
「あおうっ！　正、ただしいっ！　おおおう！」
腹や太腿や尻も新たな性器として、次々と覚醒していった。
「あああ、唯、こんなこと、こんなことう！」
背中にたたきつけられるバラガンの声すらも、快感を作る淫具となった。
「さあ、フェアリーフォースがそろって、女の歓喜を極めるがよい。そして余に魔力のすべてを返すのだ」
三人にまとわりつくすべての亀頭が、いっせいに白濁した粘液を吐き出した。一本の射精の量が、普通の人間よりもはるかに多い。何十人分もの精液が三人のスーパーヒーローにぶちまけられ、髪の毛からブーツの爪先まで余すところなく、皮膚もコスチュームも白く塗りこめられる。
同時に三人の体内にも、異常な量の精液が流しこまれた。膣から子宮まで満杯になり、逆流した精液がアスファルトに飛沫を飛ばした。
身体の内外を覆いつくした魔精液が、フェアリーフォースの肉体を沸騰させた。三人が同時に、人間の限界を超える暗黒の絶頂に沈みきった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/